

秋思の詩

菅原道真

丞相年を度て幾楽思す

今宵物に触れて自然に悲し

声は寒し絡緯風吹くの如

葉は落つ梧桐雨打つ時

君は春秋に富み臣漸く老

思は涯岸無く報ゆること猶遅し

知らず此の意何にか安慰せん

酒を飲み琴を聴き又詩を詠す

【作者】菅原道真（八四五〜九〇三年）・菅原是善（すがわらのこれよし）の三男。平安時代の大政治家として、当代随一であった。宇多（うだ）、醍醐（だいご）の二朝に仕えたが、権勢の拡大を左大臣藤原時平（ふじわらのときひら）から疎（うと）まれ延喜元年（九〇一）大宰権帥（ださいのごんのそつ）に左遷され、大宰府で没す。年五十九。没後、太政大臣を拝命し、名譽が回復され後世御霊（ごりよう）となり天満大自在天神として崇敬され、大宰府天満宮・北野神社などに祀られた。漢詩集「菅家文章（かんげぶんそう）」「菅家後集」がある。

【語釈】

* 丞相：大臣。道真は五十五歳で右大臣となり菅丞相と呼ばれていたこのとき帝は十五歳であった。

* 聲寒：声がもの淋しい。 * 絡緯：秋の虫。こおるぎ。きりぎりすくつわむしの総称。

* 梧桐：青桐。 * 君：ここでは醍醐天皇。 * 富春秋：年齢がまだ若く先が長い。

* 漸：しだいに。 * 無涯岸：果てしない。無限である。

* 飲酒：白楽天の「北總三友詩」を踏まえている（三つの友人とは琴と酒と詩のこと）

【通釈】右大臣を拝命し年を越したが、（責任のあまりの重大さや公卿たちの不穏な空気に感じて）どれほどの楽しい思いをしたことがあるうか、そのため今宵も何かにつけて自然に悲しく思うのである。

秋風の吹くところに、もの淋しく鳴く秋の虫達の声を聞き、また雨の降る夜には青桐の葉がカサカサと落ちる音を聞くにつけても、ことさらその思いを深くする。

わが君は御年もまだ若くていらつしやり、自分はいかに老境に向かっているのに、限らない君の御恩にはまだお報いしないままである。

このやるせない心を何が慰めてくれるであろうか、自分にはわからなく、「白楽天に倣（なら）つて」ただ酒を飲み、琴を聴き、また詩を吟詠しているばかりである。

【備考】

醍醐天皇の昌泰三年（九〇〇）九月十日の宮中の宴に「秋思」の勅題を賜り、この詩を詠じて奉答した。